

説教 『見えないもの、内なる人』山本 護 牧師
聖書 哀歌 3:22~24/コリントの信徒への手紙二 4:16~18

哀歌は、紀元前6世紀、バビロニアに攻められてのエルサレム滅亡直後、生き残った者が書いた詩群だと言われている。3章はその時の凄惨な表象から始まり、突如調子が変わる。「主の慈しみは決して絶えない。主の慈しみは決して尽きない(哀歌 3:22)」。さらに「それは朝ごとに新たになる(3:23a)」と手探りの希望さえ暗示されている。絶望の淵に、こんな静かな焔がなぜ灯るのか。

「[あなたの真実はそれほど深い。主こそわたしの受ける分]とわたしの魂は言い、わたしは主を待ち望む(3:23b~24)」。「受ける分」とは「分け前」のこと。家族や仲間が皆死んでも、自分が存在している生々しい「分け前」を担って、暗闇の小さな焔は消えることがない。「それは朝ごとに新たになる~わたしは主を待ち望む」。不可思議な焔は、人間存在の奥底で静かに揺らめいている。

哀歌の詩人は、絶望で塗りつぶされた現実の内に、それを超えている「見えない希望」に目を注ぐ。キリストの僕パウロも「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ(IIコリント 4:18)」と言う。哀歌の詩人が「それは朝ごとに新たになる(哀歌 3:23a)」と詠えば、パウロは「わたしたちの[外なる人]は衰えていくとしても、わたしたちの[内なる人]は日々新たにされていく(IIコリント 4:16)」と語る。詩人が「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない(哀歌 3:22)」と詠えば、パウロは「見えないものは永遠に存続する(IIコリント 4:18)」と語る。こだまは響き合って大きくなる。

「だから、わたしたちは落胆しない(4:16)」。大文字で「だから(それゆえ!)」と書かれ、「落胆」が強く否定されている。つまりパウロも、落胆させられる状況にある(4:8~9)。それに続く言葉、衰えていく「外なる人」と日々新たにされる「内なる人」とは(4:16)、どういう意味か。「衰えていく」ことなら実感がある。体力の低下は明らかで、ご飯は一膳になり、TVの前では居眠りするようになった。

それでは、私の何が「日々新たにされる(4:16)」のか。明確な自覚としては、無い。だが、きっぱり無い、とも言えぬ。「外なる人」とは「土の器」。ここに納められた「宝」は、私由来のものではないけれども(4:7)、納められているがゆえに「私自身」でもある。「イエスの命がこの体に現れるために~死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために(4:10~11)」。そういうことなのだ。私におけるキリストが、いやキリストを納めている私が「日々新たにされる」。それは「見える」平穏な時には分からないが、「見えないものに目を注ぐ」艱難の時に、永遠を覚えて(4:18)、「落胆しない(4:16)」と表明できる。誰にも艱難の経験があるゆえ、新たにされる感覚が「きっぱり無い」とまでは言い切れない。

人柄や性格、能力や実績。そうした「外なる人」で私が判断され、他者を「外なる人」で判断する。「見える」ものであるがゆえに。「外なる人」は衰えていき(4:16)、「見えるもの」は過ぎ去る(4:18)。だが私は、キリストを「内なる人」に納めており(4:7)、「日々新たにされる(4:16)」。キリストは誰にも「見えない」が、私自身に納められたキリストと「永遠に存続する(4:18)」。これがキリスト者だ。「外なる人」は服装くらいのものなのだが、これが「内なる人」と無関係でもないところが人間の妙。



【おまけのひとこと】

キリストが納められた私の「内なる人」「内なる人」にも 私として創造された偏りがあるのか
私と共に偏ったキリストがある なにしる「外なる人」の裏側だから 救いは金太郎飴ではない